

# 新しい学習指導要領に基づく論理・表現の文法指導

西武学園文理高等学校

土屋 進一



## 1 はじめに

新学習指導要領から旧「英語表現」に変わって開始された「論理・表現」の授業は、「話すこと（やり取り・発表）」と「書くこと」を重視した授業展開が求められている。その中で、アウトプットと明示的な文法指導との両立に苦慮している先生方は多いのではないだろうか。ともすると、従来の英語表現の授業のように問題演習の答え合わせや文法解説に終始してしまい、肝心の英語でのアウトプット活動がおろそかになってしまっているという課題もよく耳にする。

本稿では、論理・表現の授業の中で、「話すこと（やり取り・発表）」と「書くこと」の支えとなる文法指導のあり方について具体的な実践例を提示したいと思う。

尚、本授業実践は、筆者が2021、2022年に続き、2023年に鳥取県教育委員会より「新しい学びの創造事業『主体的・対話的で深い学び』教員スキルアップ事業」で授業助言者として招聘され、鳥取県立米子西高等学校で行った示範授業の内容である。

## 2 論理・表現の授業における文法指導

読者の先生方は、論理・表現の授業における文法指導についてどのようにお考えだろうか。新学習指導要領で「文法はコミュニケーションを支えるものとして、実際のコミュニケーションにおいて活用できること。」と謳われているように、文法はある文脈の中で使用され、実際のコミュニケーションを意識した指導が求められている。筆者がそのことについて意識しているのは次の2点である。

### (1) 文脈の中で目標文を提示する

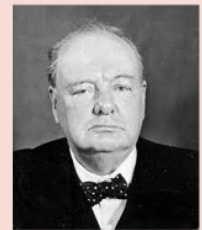
例えば、“To improve is to change.”という不定詞の名詞的用法が主語と補語の位置に用いられている目標文を教えるとしたら、どのような点に注意して指導するであろうか。筆者は、まず、図1のようなクイズを出し、目標文が歴史的に有名な人物の言葉であることを確認し、その言葉の背景となる部分（ここでは、Winston Churchill＝イギリスの政治家、元首相、ノーベル文学賞受賞）を提示することで、文に「命」を吹き込む。その上で、図2のように同じ構造を持った格言を提示し、「類似問題」として英訳に取り組ませる。

### Q. Who is this person?

- ① Abraham Lincoln
- ② Winston Churchill
- ③ Adolf Hitler

ANSWER

②



(図1)

① 向上することは変化することだ。② 完璧になることは頻繁に変化することだ。to 不定詞「～すること」  
(名詞的用法)① To improve is to change.

S C

② To be perfect is to change often.

S C

(図2)

## (2) 明示的な文法説明は活動の後で行う

論理・表現の授業では、生徒の積極的なアウトプットを促すために、文法の明示的な説明は活動の後に行うことが望ましい。これは、学習者がまず具体的な言語タスクやコミュニケーション活動を通じて言語を実際に使用し、その後に文法に焦点を当てることで、コミュニケーションの流れを妨げずに文法の理解を深めることが可能となるからだ。例えば、後述する「Destination Discovery Game」や「Destination and Purpose Discussion」の活動が終わった後、教師は生徒たちの発話の観察を踏まえ、発生した言語の誤りにフォーカスした文法解説を行うことができる。これにより、生徒たちは自分たちのコミュニケーション活動の中で「どう言えばいいのだろう」というニーズの高まりを感じ、文法や英語表現の重要性を実感することができる。その上で教師の明示的な文法解説を聞けば、いわば、乾いた砂に水が染み込んでいくようにその表現や文法が入っていくであろう。

このように、文法説明は、生徒が実際に使用した文法に焦点を当て、文脈を通じて理解を深めることが目的である。このアプローチにより、生徒は文法を単なるルールや演習の対象として捉えるのではなく、コミュニケーションの一環として位置づけ、自らの表現力向上に結びつけることができよう。

## 3 話すこと(やり取り)を促す活動例

### (1) Destination Discovery Game

この活動は、ペア（生徒Aと生徒B）になり、図3のようなテンプレートに沿って生徒Aが日本の観光地に関するクイズを出し、生徒Bが図4のように答えるというシンプルなものである。

Speak following the template.

**A**

If I go to this place,

I **want to visit** ( )

~したい

**to** ( ).

~するために

(図3)

Speak following the template.

**B**

Oh, you **want to visit**

( ) **Prefecture.**

(図4)

テンプレートを与えることで、生徒は安心して「即興的」に内容面にフォーカスすることができる。テンプレートで示された目標文法は、不定詞の名詞的用法と副詞的用法（目的）である。英語表現に加え、ここでは、どの場所がどんな観光地であるかといった地理的な背景知識も必要となるのが魅力である。

すなわち、これは、CLIL (Content and Language Integrated Learning) 「内容言語統合型学習」の要素を取り入れた活動である。すべてのペアが異なる観光地についてクイズを出し合っているので、活動を終えたら、教師は生徒を指名し、何組かにそのクイズを再現してもらい、クラス全体にフィードバックするとよいだろう。その生徒の興味・関心などが分かって大いに教室全体が盛り上がる。



## (2) Destination and Purpose Discussion

これは、先の(1) Destination Discovery Gameとのつながりを持った活動であり、次のような具体的な目的や場面・状況を与え、それぞれの役割でやり取りを行う。

### ①Situation:

The destination for Yonago Nishi High School's school trip next year will be decided through student discussions.

### ②Scene:

You will discuss the school trip destination with an Assistant Language Teacher (ALT).

### ③Purpose:

You'll have a conversation with the ALT in English to express your opinions.

ALTとのModel Dialogueを見せた後、図5のようなテンプレートを提示し、生徒同士ペアになって活動を行う。

### Speak①

▼ Start from the following line:

**A (ALT):** Where do you want to go for our graduation trip?

**B (Student):** I want to go to ( ).

**A (ALT):** Why do you want to go there?

**B (Student):** \_\_\_\_\_.

**A (ALT):** \_\_\_\_\_.

(図5)

ここでの活動も(1) Destination Discovery Gameと同様にwant to ~ (不定詞の名詞的用法)が目標文であり、この活動の後に、明示的な説明を行う。

## 4 書くことを促す活動例

ここでは、Making a Creative Storyという思考力を伴ったライティング活動をご紹介します。先述した2の(1)の目標文(To improve is to change.)にもう1つの目標文(It is difficult to study English.)を加え、ペアで、2つの目標文を含む対話文を創作させる。

この時、目標文を生かすようなストーリーをペアで協働しながら論理的に考えさせることがポイントだ。生徒がこのタスクに取り組む前には、図6のように、例を示すことも大切である。

### Example

A: "It is difficult to study English."

B: "That's true, but to improve is to change. Trying different methods can make a difference."

A: "You're right. I've been using the same approach for a while. It's time to switch to a different approach."

(図6)

このタスクに取り組むにあたり、Google WorkspaceのSpreadsheetを活用すると、生徒のライティングの様子をクラス全員で共有できるのでおすすめしたい。実際に、生徒が創作した作品を紹介する。

A: It is difficult to study English. Do you like to study English?

B: Yes, I like studying English. Can you teach me English?

A: Of course. I can study English with you. To improve is to change.

(生徒が創作した作品)

ここで特筆すべきは、上記Bの発言Can you teach me English?の助動詞の選択である。CanよりもCouldの方が丁寧であるのに、なぜCanを選択したのか理由を生徒に尋ねると、これは友達同士の対話であるので、CouldよりもCanの方が自然であると答えた。目標文を生かしながら、このように既存の知識・技能と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより、知識・技能の定着を図ることを見取ることができた意義は大きい。

## 5 おわりに

本稿では、鳥取県立米子西高等学校での示範授業をもとに論理・表現の授業での具体的な指導例をレポートさせていただいた。今回の経験から得た最も重要な教訓は、他の学校で初めて指導する場合でも、入念な準備と生徒の主体的な学習への姿勢を信じ切ることが重要であり、それに加えて適切な活動の仕掛けと活動同士のつながりがあれば、授業が効果的に活性化されることである。

冒頭でも述べたように、(1) 文脈の中で目標文を提示する (2) 明示的な文法説明は活動の後で行うの2点を念頭に置き、「文法はコミュニケーションを支えるものとして、実際のコミュニケーションにおいて活用できること」を意識した授業を今後も行っていきたい。

本稿が先生方の論理・表現の授業での文法指導の一助となれば幸いである。

### 謝辞

本授業を行うにあたり、鳥取県立米子西高等学校の英語科の先生方には、授業当日のサポートのみならず、授業実施に至るまでの打合せにおいても多大なるご協力をいただきました。また、参観して下さった鳥取県内の他の高等学校の先生方にも、授業後の研究協議会にて貴重なご意見・ご感想を賜りました。

ここに心より感謝申し上げます。



### 【お問い合わせ】

今回の示範授業で使用した

①指導案 ②パワーポイント資料(PDF)

③ワークシートの3点をご希望の方は、下記のメールアドレスにお名前・ご勤務先・この記事に関するご意見・ご感想・ご質問などをお書きの上、送信してください。資料は1週間以内に必ずお送りいたします。また、講演・示範授業のお問い合わせもお待ちしております。

tsuchiya@bunri-s.ed.jp

### 《参考文献》

- ・土屋進一(2021)「鳥取県「新しい学びの創造事業『主体的・対話的で深い学び』教員スキルアップ事業」の実践報告」(英語実践事例シリーズ No.1)
- ・土屋進一(2022)「ICTを活用し生徒が生き活きと活動できる英語授業」東京書籍ホームページ (英語実践事例シリーズ No.10)